

中国の小鳥前生譚（九）

—追加資料⑧—

繁原 央

キーワード／中国の昔話、小鳥前生譚、中国民間故事集成、広西壮族自治区

凡例

一、本稿は、中国における小鳥前生譚の、現在伝承されている話の採集報告資料を整理紹介したものの追加資料⑧である。二〇〇四年八月から二〇〇六年八月までに管見に入った中国の民間故事集から収集した。その後の収集もあるが今回もこの間のものに限定する。

二、選択の基準は従来どおり、人が死んで鳥になり、死んだ原因となったことを鳴き声で示す（鳥の鳴き声を人語として聞く、所謂聞きなしをしている）という部分があるかどうかで選んだ。

三、中国北方の黒竜江省をAとし、順次省ごとに海南省A Aまで二七に分けてある。台湾は便宜上別途に考察したい。北京・上海など特別市のものはそれぞれ河北省・江蘇省に含めた。

四、資料の量が省によって違うのは、管見に入ったかどうかの差による。資料の番号は省ごとの通し番号で、追加資料②に続く。追加資料⑦が「Z広西壮族自治区」の42までだったので、本稿は「Z広西壮族自治区」の43～56までを収める。本稿では十四項目

追加したので、従来のものと合わせて四五四項目になる。五、今回も各項目に簡略な訳を付した。類話を調べる時の参考になれば幸いである。

Z広西壮族自治区

43、「斑鳩」蔣德章・講述、男、漢族、73歳、初小文化、灌陽県西山瑶族郷下潤村の人。廖松雲・収集整理。灌陽県に流伝。一九七八年・収集。……『灌陽県民間故事』第一集、中国民間故事集成広西分巻。広西壮族自治区灌陽県文化館編。一九八六年五月、七三～七五頁。広西人民出版社『瑶族民間故事選』（一九八四年）及び『民間文学』一九八四年六月号に発表。

斑鳩のなく声はなぜ咕咕（ココ）というのか。瑶族の梁姓の人々に、次のような話が伝えられている。昔、瑶族の梁という娘が王家に嫁にいった。その姑は浮気性の女で、ある日、姑が夫に隠れて浮気をしているのを嫁がみてしまった。姑は自分の悪事が知られるのを恐れ、一計を案じて嫁に罪を着せようとした。村中に「嫁が浮気をしている」と叫び、役所に嫁を告発した。役所の役人は姑と嫁と浮気相手を集めて裁いた。姑が「わたしはこの目で嫁が浮気をしているのを見ました。王家の家風をこわした」というが、嫁は承知しない。「姑は間違っている。その密通相手など

知らない」という。役人は姑と嫁が認めないので、姑と嫁に浮気相手を竹で殴らせた。嫁は腹を立てていて、男が泣き叫ぶほど打った。次に姑が男を殴る番になり、齒をくいしばって竹を高く持ち上げた。しかし、打ち下ろすときは、鳩の毛のように柔らかくそつと打った。一、二、三、四。役人はそれを見て、姑を止めて「打つな。誰が密通したかわかったぞ」といい、姑の密通だと判決を下して、四十たたきの刑にして帰した。姑は役所で悪事が露顕したので、恨みに思い、嫁に報復しようとした。ある時、姑が嫁に油茶を作って舅に食べさせるよう言った。嫁は姑の計略を知らず、油茶を作り、姑の挙動に気づかなかつた。姑はこっそり油茶に毒薬を入れた。舅は油茶を飲むと、両足を伸ばし、目を閉じて、あの世にいった。姑は泣き騒ぎ、役所に嫁が舅を毒殺したと訴えた。姑は役人に金を渡し、賄賂とした。役所に嫁が連れてこられ、役人が尋問した。嫁は認めなかったが、役人は金をもらっていたので、鉄の棍棒を赤く焼いて、嫁に白状するように迫った。嫁は「無罪です。お役人さま」と叫ぶが、役人は金で耳を塞がれ、嫁の叫び声を聞かず、殺した。嫁は死んで斑鳩となり、実家に飛び去った。実家には、父と母、兄と兄嫁はもう亡くなっており、姪が一人いるだけだったが、その姪のところに来て、涙を流し「姑が罪を着せた」と長いこと鳴いた。斑鳩の目の涙は枯れ、声は短くなり、ただ「姑姑」(ココ)と啼いた。それからみなは斑鳩の鳴き声が「ココ、ココ」と鳴くというようになった。

(嫁と姑の争い)

44、「个工鳥」 蒋德章・講述、男、漢族、73歳、初小文化、灌陽県西山瑶族郷下澗村の人。廖松雲・収集整理。灌陽県に流伝。一九七八年・収集。……『灌陽県民間故事』第一集、中国民間故事集

成広西分巻。広西壮族自治区灌陽県文化館編。一九八六年五月、七五〜七六頁。広西人民出版社『瑶族民間故事選』(一九八四年)及び『民間文学』一九八四年六月号に発表。

都龐嶺の山に小鳥がおり、毎日「个工、ココン」と鳴いている。人々はその鳴き声をもとに、个工鳥という。瑶族の袁という姓の人の間で、次のような个工鳥の物語が伝えられている。袁家に金持ちに雇われている貧乏な作男がいた。賃金を決めて年末に支払ってもらう約束をした。その作男は文字もよめず、書くこともできなかった。ある方法を考えた。それは一日の仕事をしたら、泥を丸めて竹筒の中に入れておき、年末になったら、竹筒の中の泥の塊を数えて、金持ちに清算させる方法であった。それを悪意ある金持ちが気づかないだろうか。金持ちは清算する前日の晩、ひそかに水を竹筒に入れ、泥の塊を溶かしておいた。翌日、作男が竹筒を持って金持ちのところへ清算に来た。竹筒から泥の塊を出そうとして、逆さにしても出てこない。作男はびっくりした。何個もの泥の塊のほすが、大きな一つの泥に変わっていて、一年働いた労賃が一回の労賃になっていた。作男は泥の塊をみて、怒って死んでしまった。作男は死んで小鳥となり、山の上に停まって「个工、ココン」と鳴く。それから人々はこの小鳥を个工鳥とよぶようになった。

(55、「六十六工工」鳥)の類話)

45、「清明鳥」文仰秀・講述、女、漢族、53歳、灌陽県新街郷永富村。この話は灌陽県一帯に流伝している。周君・収集整理。男、漢族。灌陽県新街郷にて収集。一九八三年・収集。……『灌陽県民間故事』第一集、中国民間故事集成広西分巻。広西壮族自治区灌陽県文化館編。一九八六年五月、八九〜九三頁。

清明節になって山にゆくと「清明酒酔、チンミンチヨウスイ」と鳴く鳥の鳴き声を聞くことができる。この鳥はなぜこのように鳴くのだろうか。昔、都龐嶺の麓に姓は趙、名を清明という秀才が住んでいた。この人は眉目秀麗で、琴棋書画、詩詞歌賦が好きで才子だったが、七回も落第していた。趙清明の家は七十になる老母がおり、また聡明で美しい妻の張氏を娶った。趙は七回も落第したが、役人になることを願っていた。ある年、母と嫁が何とか生活できるようにしておいて、趙清明は都に会試を受けに行った。同村に呉という金持ちがいた。呉の家には呉標、あだ名を呉敵という息子がいた。呉敵は幼いころから読書嫌いで、槍や棒を振り回すことを好み、この家では息子のために拳の師匠を雇い、家で拳や槍、棒の練習をさせて四年になった。呉敵は堂々たる大丈夫になったが、悪い連中と付き合っていて、どうしようもなかった。ある日、張氏が洗濯しているところを呉敵に見られてしまった。呉敵は張氏が美しいのを見て、その女が趙清明の妻だと知った。呉敵は趙清明が上京して試験を受けに行っていると知り、機会を狙っていた。まず自分の妻に趙家に行くように言いつけた。呉敵の妻が趙家に行くと、母と嫁が他家の衣服を洗い、一日にくらかの銭を得て、生活していることを知った。二人に呉家に行つて働けば、ずっといい賃金がもらえるよ、他家の衣服を洗うよりずっといいと言った。母と嫁の二人は同意し、呉家に行くと洗濯の仕事以外に別のこともなく、毎日の三度の食事も上等なものだった。呉敵とその何人かの妻たちは、二人を特別待遇にしていた。母と嫁の二人が呉家に住み着いて一月ほど経つと、主人の待遇に疑惑を持っていたけれども、何ら悪意はないと思ひ、意に介さなくなつた。ある晩、呉家の若い妻の一人が嫁の張氏をある部屋に

連れていった。部屋にはテーブルいっぱい料理が並び、酒席が用意されていた。何人かの妻たちが張氏に酒を勧め、酔わせて、呉敵の自由にさせられてしまった。呉敵は張氏が自分の家で死ぬのを恐れ、また趙清明が役人となって帰ってくるのを恐れ、自分に不利ならぬよう相談し、五十両の銀子を母と嫁に与えて帰した。張氏は家に帰って、夫にあわせる顔がないと思ひ、母が見ていない隙に首を吊つて自殺した。母はそれを見て大声で泣き叫んだ。母は嫁と助け合っていたことを思い、もう分別もなく、壁に頭をぶつけて死んだ。親戚のものは趙家の老母と嫁が、このように惨死したのは呉敵のせいだとわかつていたが、どうしようもなかった。ただ、二人は呉家から五十両の銀子をもらっていたので、二人の棺材を買って埋葬した。一方、趙清明は都について、一篇の奇文が試験管に見られ、役人になれないだけでなく、訓戒を受けそうになった。趙清明は前途に望みがないとわかり、都にいても無用として帰ることにした。帰路の途中、盜賊にあい身包みはがれてしまった。清明は途中、飢えと寒さで死にそうになり、「こんな状態になって、どの面下げて家に帰り、老母と妻に合わせる顔があるうか。死んだ方がましだ」と思い、腰から帯をほどいて樹にかけて首をつる準備をした。そこに旅芸人がきて助けてくれた。その人は趙清明が上京して試験をうけ、落第した不幸者と知った。また、清明の言うことが凡人の言でない、敬服に値すると思つた。その流浪の芸人は姓を劉、名を浪という。流浪の意味である。劉浪は学問をしたことがある読書人であったが、朝廷が腐敗しているのを見て、文を捨て、武につき、郷土の紳士となつていた。劉浪は趙清明に自分の身分を話し、清明に役人になるのをやめるようにいい、自分の知恵で別の新しい路を開くようにさ

せた。そこで、二人は古廟で酒を用意し、義兄弟の契りをした。趙清明が劉浪より二歳年上なので、兄といい、劉浪は弟と称した。趙清明は劉浪といっしょに家に帰った。老母と妻が世を去ったと聞き、絶えんばかりに泣き悲しみ、親戚のものが呉家で母と妻がうけた仕打ちを清明に話した。劉浪は聞いて呉敵を殺して、兄に代わって仇を雪ごうと誓った。趙清明はもともと読書人で、話すことは「理」のことばかり。自分の老母と妻が呉敵に害されたこと知っても、劉浪に「証拠もなく、どうして仇を討てようか」という。劉浪は怒り「まさか兄嫁たちが、呉敵に殺されていないとでもいうのか」趙清明は齒をかんで「兄に代わって仇をうってくれ。呉敵の奴と、その女房たちとともに、仇を討って母と妻を祀ってやる」劉浪は緑林の好漢（武侠の世界）であり、役所なんか当てにはならない、今は自分が呉敵を殺しても、捕まえられようかと考え、一陣の風のように呉家に来てみな殺しにした。金持ちと妻と呉敵とその妻たち、皆殺された。しばらくして劉浪は血だらけの狗の頭を持ってきて、趙清明の前に置いた。趙清明は郷里の人たちに品物を持たせ、酒と飯の供物を用意し、劉浪が提げてきた頭を、母と妻の墓に供えた。この時、ちょうど清明節で、山中心な花が咲き、いくつかの爆竹の音がし、趙清明と劉浪は呉敵とその妻たちの頭で、墓を祀った後、墓の前で酒盛りをした。趙清明は自分が上京して、試験におもむき、合格したいと思ったが、落第して帰ってみると、家では皆死んでしまっていた。家に帰ってきたことを墓前につけると、心は悲しくなくなった。自分で飲み、どれだけ杯を傾けたか知らなかった。人事不省になり、墓のかたわらに倒れ臥した。趙清明の老母と妻は死後二羽の鳥に変わった。二羽は墓のそばの大きな松の木の上に止まり、絶えず涙を流して

いた。母の二つの眼はもととよくなかったが、鳥になってからも自分の息子が自分を祀ってくれると分かった。それをみても見えないので嫁に「清明はどうなっているの」と聞くと、嫁は「清明は酒に酔っている、チンミンチョウスイ」と告げた。趙清明が母と妻の墓から離れると、母はまた聞く「清明はどうなったの」嫁は語尾を延ばして「清明——酒酔、チンミン——チョウスイ」とつげる。今も清明節になるたびに、山の上に行くとき、「清明酒酔——チンミンチョウスイ」という鳥の泣き声を聞くことが出来る。それからは趙清明の妻が死後変わった鳥を「清明鳥」といい、あるいは「清明酒酔鳥」という。

（長い話で、主人に殺された使用人の恨みと仇討ち物語に発展している）

46、「卜嘿鳥」陸姪麦・講述、女、68歳、農民、文盲、西林県那勞村の人。岑護双・収集整理、男、30歳、壮族、百色右江民族博物館幹部。西林県内各壮族の村落に流伝。一九八二年五月・収集。……『西林民間故事集』中国民間文学三套集成。西林県民委、文化局編。一九九〇年五月。九七〜九八頁。

布羅砮の時代、馱娘江の川の中に巨大な岩があり、その岩の上に父と子の二人の漁師が住んでいた。息子はまだ幼く、父が養っており、父母の両方の役割をしていた。毎日、朝暗いうちに馱娘江へ漁に行っていた。父親は息子を愛していて、毎回魚を捕って帰り煮て食べて、最もいい魚の肉を息子に食べさせ、自分は魚の頭と尾と骨を食べていた。息子は父親が苦勞して養ったので、大きく変わった。しかし、幼いころから怠け癖がついて、怠け者になっていた。別の人の挑発にすぐのるような、軽薄な人間となった。ある時、一人の人が彼の父親と仇同士となり、息子に言った「お

まえばバカだな。人が魚は骨がうまいというだろう。いつも魚を食べるとき、おまえの父親は魚の頭を選び、おまえにはあまりものを食べさせるだろう。おまえは疑わないのか」息子はその人のいうことに一理あると思ひ、父親を殺す気がわいてきた。大水の季節となり、馱娘江の水が奔流したとき、父親は生活のために魚を捕りに行った。晩に飯を食べるとき、息子が「おとう、家の中は暑いから、外で食べよう」父はそこで、門外の石のところへ食べた。半分食べ、息子は父親が頭を低くしたとき、父を押し、滔滔とわく馱娘江に突き落とす。父が死に、息子は漁をするがうまくできなかった。一日また一日、彼は餓えた。死にそうになったとき、はっきり後悔の心が湧いた。父は正しかった。後に息子は餓死し、「卜嘿鳥」(卜嘿とは壮語で「爹」おとうの意。この鳥は黒い色をした小鳥)に変わった。毎年、馱娘江に水が漲るとき、兩岸の人は川の中のある岩の上で「卜嘿、プモ」と凄惨になく声を聞くことができる。

〔ほととぎすと兄弟〕型の変形とでもいうべき話で、兄弟が親子になっている点が特異である)

- 47、「張四方鳥」黄公受・講述、男、壮族、85歳、小学文化、西林県那佐苗族郷那来村の人。陸靈芝・搜集、女、26歳、高中文化、壮族、郷文化站人員。覃建榮・搜集、男、30歳、初中文化、壮族、郷文化站人員。岑護双と劉曼輝(男、20歳、壮族、初仲文化、農民、西林県那勞郷の人)・整理。西林県那佐郷西洋江流域壮族地区に流伝。一九八六年十二月・収集。……『西林民間故事集』中国民間文学三套集成。西林県民委、文化局編。一九九〇年五月。九八―一〇〇頁。

いつのことか、西洋江のそばに張四方という人が住んでいた。

この人は貧乏で、妻子がいたが、貪婪で狡猾な男だった。あるとき、土手を歩いて村に行くとき、若いきれいな娘たちが山歌を歌っているのを見て、その中の美しい娘に目をつけた。後で聞くと、その娘の家は金持ちで棉布も多く持っているという。どうにかして娘の歓心を買って、その家の棉布を騙し取ろうと思った。そこで張四方は毎日、その娘の家へゆき、山歌を歌った。歌っているとその娘は張四方の腹の中など知らないもので、甘い蜜のような言葉を聴き、嫁になる約束をした。張四方のわなにかかったわけで、四方は田の中を樂しげに帰り、娘が母親に結婚のことを言うように迫った。二日目に張四方が娘の家へ行き、甘い言葉で言った。

「わたしの宝ものさん、お母さんは結婚を許してくれたかね。今日、結婚の挨拶にわたしの家に行きましょう。いいかね」娘は計略とも知らず、信用してうれしく思い、すぐに家の棉布を花嫁衣裳にして、親につけて四方について行った。張四方の家に行くには必ず広くて深い川を渡らねばならなかった。川の近くに來ると、四方が娘に言った。「わたしの嫁さん、濡れるから、早く着物を脱いで、棉布と着物を渡しなさい。川を渡ったら返してあげますから」娘は結婚したのだから、渡さないわけがない。張四方の言うとおりに、身に着けた衣服を脱いで、四方に渡して川を渡った。四方は川を渡った娘が身に何も着けていなくて、川の向こうでぼんやりと四方が川を渡るのを待った。この新郎が娘を娶る気などなく、娘の棉布を騙し取ろうとしているなんて、どうして解らうか。張四方は川を渡ると棉布と衣服を持って姿を消してしまった。娘は張四方がいつまでも来ないのを見て、やっと騙された気が付いた。川辺で泣き喚ぎ張四方を罵った。娘は泣き続け深夜になって凍え死んでしまった。死後、娘の魂は可哀想な鳥に変わり、

身体には一本の毛もなく、昼間は姿を現さないで、川辺の木の中に隠れているが、深夜になると西洋江辺に出てきて、凄惨に「張四方、チャンスーフアン」と鳴く。空が明るくなるとやめる。何ヶ月かたつと「張四方鳥」は夜も鳴かなくなった。

（悪い男に騙されて娘が鳥になる話だが、類話は見つけていない）
48、「包工包谷」廖美參・講述、女、37歳、壮族、高中、龍州県上降郷印山屯の人。農民。黄紅梅・収集、女、17歳、壮族、高中、龍州県上降郷印山屯、学生。……『龍州県故事集』（第一集）中国民間文学三套集成、龍州県三套集成編委会、農秀琛編。一九八七年十一月。三〇〇～三〇一頁。

わが故郷では、春種を蒔く季節になると、田の中で「包工包谷、パオコンパオクー」という鳥の鳴き声がある。この鳥の声は悲しく涼しげで、これについては次のような伝説がある。昔々、村に二人の姉妹がいて、姉を巧妹といい、妹を金鳳といった。二人とも十数歳だった。二人はよく働き聡明でもあった。巧妹は人並みすぐれて美しい娘に成長し、村人はみな百里四方で一番美しいとほめた。巧妹のつらいのは二歳のときに母親に死なれたことで、父親は後妻を娶って、生まれたのが金鳳だったのだ。後妻は巧妹に対して悪意を持っていたが、金鳳と巧妹は親しく尊重しあっていた。悪心を持った後妻は巧妹が大きくなると、本当に忌み嫌い、巧妹を殺す企みをたてた。ある年の春、種まきの季節になって、人々が忙しく種を蒔いていると、後妻が計画を実行した。半斗の種を煮て袋に入れ、もう半斗の種は水につけておき別の袋に入れた。また芭蕉の葉にご飯とおかずを包み、準備ができると巧妹と金鳳を呼んで言った。「おまえたちはもう子どもではない。わたしがご飯を用意したから、この種を持って二人で蒔きに行きなさい

い。種の芽が出たら帰っておいで。芽が出なかつたら帰ってきてはいけない。ご飯を食べさせないよ」そうして煮た種を巧妹に、生の種を金鳳に渡した。巧妹と金鳳は田にやってきて、種の袋を放り出して、おしゃべりをしていった。いざ種を蒔くとき、金鳳は種の袋を間違えた。種を蒔き終わって、何日か経って、巧妹の種は発芽したが、金鳳の種は腐っていた。巧妹は妹にいい、先に家に帰った。後妻は巧妹が帰ってきたのを見て、不思議に思った。巧妹は後妻に「お母さん、種の芽が出たよ。信じないなら見てください」後妻は怒って田に行ってみると、はたして巧妹が蒔いた種は発芽していた。後妻は顔をしかめて帰るしかなかった。巧妹は家で妹が帰るのを待った。金鳳は田で種が発芽するのを待った。そのうちに金鳳は餓死してしまい、一羽の鳥に変わった。春種まきのころになると、田に飛んできて、絶えず鳴く。「包工包谷、パオコンパオクー」と。人々が種を蒔き終わると、飛び去ってしまう。

（広く分布する継母の継子いじめの話）
49、「播谷鳥」（本文は記録整理者の投稿による）陸永天・記録整理、男、48歳、漢族、農民、高小文化、広西賓陽県黎明郷横嶺村。賓陽県の各地に流伝。……『賓陽県故事集』上冊、中国民間文学三套集成、賓陽県民間文学三套集成編委会編。一九八六年より後の刊行。一九二～一九四頁。

伝えによれば、ある村に住んでいる一家があった。三人家族で夫は小商いをしており、妻は家事。それに病気がちの息子がいた。妻は仕事ができるが心がねじけており、人に害を与えると隣近所との関係はよくなく、人々は彼女を黄蜂婆と呼んだ。ある年、黄蜂婆の息子が妻をもらった。この妻は聡明で勤勉で善良だった。

よく歌をうたい、彼女が行くところ笑い声が絶えず、仕事をしていないときなど、彼女が歌うと、鯉も水面に顔を出し、たくさん鳥も鳴くのだった。その声は若者の耳に聞え、若者たちは三々五々グループになって、この嫁と対歌を挑みに来た。黄蜂婆はそれをみて、恨み心を抱き、嫁は風俗をこわす軽佻なものだとしかつた。二年目の田植えのころ、この嫁は、自分の父母が何日も田植えをしているのを、助けに行った。田を見るといくらも植えてない。黄蜂婆に「お母さん、うちの両親は年老いているから、田植えができません。何日か助けに帰っていいですか」というと、黄蜂婆は目をくるくる動かして「うちの飯を食べたら、うちの仕事をやるものだ。明日もし大田の田植えをやり終えたら、帰ってもいいが、そうでなければ、帰ろうなんて思うんじゃない」嫁は姑の黄蜂婆にこういわれ、その大田を植えようとした。それは三、四ムーもあり、一人どころか二三人でも一日で植え終わることは不可能だった。嫁は黄蜂婆が意地悪しているとわかったが、自分の父母が年老いていることを思うと、帰心矢の如しで、黄蜂婆のいうとおりにした。大田を植え終わるためには、眠ることなく夜まで植えるしかない。あくる日の空が明るくなると、すぐ田植えに行った。黄蜂婆も人をやって様子をみさせた。植えはじめて、仕事の速い嫁が手足を動かし、朝早くから午後まで植えたがまだ三分の一ほど残っていた。この時、嫁は一日一夜働きつめて疲労し力尽きようとしていた。そこで悲しくなり、歌が口をついて出た。(歌略) 路行く人は聡明で仕事のできる嫁に同情し、田に降りて助けようとしたが、あの黄蜂婆の悪口を恐れた。嫁はこの大田に苗を植え終わったら、実家に帰ることができると思うと、植える手は思わず速くなり、植え終わったときには、太陽は山に沈

んでいた。嫁は長いため息をつき、疲れた身体を休めた。足を田に踏み入れたら、天地がひっくりかえったようになり、二度と起き上がれなかった。あくる日、黄蜂婆が家で嫁のかわりに料理しているとき、一羽の播谷鳥(種蒔き鳥)が飛んできて、家の上にとまって長いこと飛ばないでいた。その悲しげな鳴き声は「家婆太毒、チアポタイトゥー」(はあさんはひどい)と鳴くようだった。そのうちに大群で飛んできて、旋回して飛び去らず、一斉に嫁の恨みをこめて「家婆太毒、チアポタイトゥー」と声をそろえて鳴いた。黄蜂婆の心を寒からしめた。伝えによると、その種蒔き鳥はあの嫁が変わったものだという。毎年田植えのころになると播谷鳥は南方の田野で「家婆太毒、チアポタイトゥー」と鳴く。まるで後世の姑が善良な嫁を苛めないように戒めているようだ。

(姑の嫁いじめの話)

50、「百勞鳥」(漢族)(講述者の名がない) 陳啓善・記録整理、和吉郷新陳村。……『資陽県故事集』上冊、中国民間文学三套集成、資陽県民間文学三套集成編委会編。一九八六年より後の刊行。一九九〇二〇〇頁。

伝説によると、伯勞精はむかし人間だったという。県の役人に首をはねられたそうだ。しかし、彼は別人になって生き返ることができたが、家に帰って母親に三回殺害され、とうとう生き返れずに伯勞鳥になったのだ。伯勞精が首をはねられ、頭のない身体に変わり、両手で血がしたたる首をもって帰ってきた。野菜畑を通ると、農婦が紅い藤を切っているのを見て聞いた。「おねえさん、わたしは首を切られたが、生き返ることができませんか」農婦が「できるとも。あんたがこの藤蔓を切つたならね」それを聞くと、彼は喜んで家に帰り、母親に「おねえさんが、首

を切られても、生き返ることが出来るといった」というと、「世の中で、どこに首を切られてまた生き返ることがあるのか」と母親は答えた。これが第一の害である。彼はまた妻に「わたしの首を大甕のなかに入れておき、何日か経って虫が湧いても、首に粥をやってくれ」と言いつけた。何日かたって本当に虫がわいた。妻は言われたとおりにして再び生き返るのを待っていた。ある日、母親が妻の父が死んだと知らせにきたので、妻に帰って親孝行するように言った。妻は夫が生き返るのを待っているといい、夫の首に一日に二度粥を与えなければならぬから、離れるのはダメだと言った。母親がわきから「おまえは実家に帰りなさい。どうして父親孝行をしないのか、私が粥をやっておくから」といった。母親が別に計略を持っているなど、どうしてわかるのか。母親は熱い粥を大甕の中の虫にそそいだ。虫は全部死んでしまった。妻が帰ってきて、虫がすべて死んでいるのを見て、がっかりして泣きつづけた。伯勞精はまた妻に、「死んだ虫の蛹を十字路の入口に埋めて、上に竹を植えなさい。竹が大きくなったら、竹を売りなさい。そのとき、多くはいらぬ、少ないのもダメ、ただ九十九文ほしいといえ」という。ある日、路を通る人が太い竹を一本買おうとして、いくらか聞いた。母親が「かまわないよ。竹一本くらい。気に入った竹を切っていくな」という、大刀を手に、母親は路行く人に切らせた。一刀のもとに切ると、竹は泣き声を発した。この人は奇怪に思い、母親に「声がしたが、私の空耳か」といい、竹を切った。中に竹の節ごとに一人の兵士がいて、武装していた。身には甲をつけ、長剣を持ち、外に出ようとしていたのだった。こうして、母親は息子のいうことに悉くそむいたので、とうとう息子は生き返ることができなかった。この兵士が変わっ

て今の伯勞鳥となった。それから伯勞鳥の身体には紅と白の長い尾がある。この長い尾は宝剣のようである。

(母親が息子の生き返るのを阻んだので、鳥に転生したという珍しい話)

51、「杜鵑花和杜鵑鳥」陸阿姣・講述。女、65歳、壮族、文盲、龍江区の人。徐氏・講述。女、67歳、文盲、雒容南慶郷の人。熊芳・採集。女、12歳、学生。方慧萍・採集。女、25歳、県教師進修学校學員。頼建耀・整理。男、教師。黎私・整理。男、報社編輯。……『鹿寨県民間故事集』中国民間文学三套集成、広西壮族自治区鹿寨県三套集成編輯組編、一九八七年八月。一五〇～一五三頁。

映山紅はまた杜鵑花とよばれる。わたしはこの杜鵑花を見ると、あの物語を思い出す。それは昔々のことだ。ある田舎の村に杜という姓の家があった。妻が早くに死に五歳の娘・杜鵑が残された。二年経って父親は杜鵑に後妻の王氏を連れてきた。王氏は四歳の息子がいて、名を杜川と改めた。姉と弟の二人は兄弟ではないが、仲良くなった。ただ後妻は自分の息子を大事にして、杜鵑をこきつけた。杜鵑が六歳になると、洗濯や水運びをやらせ、七歳になると山に芝刈りにやった。弟のほうは食事も十分食べたが、杜鵑は腹をすかせてばかり。弟は良い着物を着ていたが、姉は粗末なものだった。いつも打たれ罵られたが、父親につげはしなかった。父親は外で人に雇われて仕事をしており、一年のうち、家に帰ることは少なかった。杜鵑は後妻にいじめられて、こっそり母親の墓の前で泣いていた。その時、杜川が近くにやってきて、姉が涙を流しているのを見て、母親に背いて、姉に食べ物を持ってきてやった。ある年の冬、父親が銭を稼いで帰ってきた。娘が一重の着物でいるのを見て、王氏に「二斤の棉を買ってきて、子ど

もたちに棉衣を作つてやれ」といった。王氏は買つてきた棉衣を息子の棉入れにいれて、杜鵑の衣裳には山からとってきた芭芒の花を入れた。父親は娘が新しい棉衣を着ているのに、唇が黒くふるえているのを不思議に思ったが、衣の角をひらいてみてはつきりした。父親は王氏を呼び責めた。王氏は怒りを杜鵑の身に移し、杜鵑を目の中の釘と思い、何とか彼女を亡き者にしたいと思うようになった。また一年経つて、父親は病気になる、亡くなつてしまった。こうして王氏は自分勝手に杜鵑を殺害しようと思つたが、人の耳目があるので、三日六夜考え、一つの計略を思いついた。ある日、王氏は二つの袋に黄豆の種を持ってきて、姉と弟の二人に「おまえたち、父親が死んで家のことが大変になつた。杜川も姉といっしょに種蒔きを学びなさい。二人いっしょに山に行き、黄豆を植えて発芽したら帰つてきなさい。発芽しなかつたら永遠にこの家の門をまたがせないよ」姉と弟の二人は、食べ物と豆の種をもち、鋤と山刀を帯びて山に登つた。一日目に茅の小屋を作り、二日目に棘の草むらを切り開き、草を焼き、三日目に種を蒔こうとした。土を掘り返して弟は手を血豆だらけにして、痛くてたまらず、鋤を動かせなくなり、姉が助けてやつた。弟は食べる量も多く、何日も経たないうちに、食べ物なくなつた。姉は食べ物も弟にやり、自分は小さい豆の種を食べて飢えをしのいだ。弟は姉が豆の種を食べているのを見て、自分も何粒か口に入れて食べた。奇怪なことに姉の豆の種は柔らかく香ばしいが、自分の豆の種は硬く青臭い。弟はこっそり姉と豆の種を変えてもらった。地を掘つて種を蒔いた。俗に「三日の麻、四日の豆」という。豆は植えて四日もすると、姉のところの豆は発芽したが、弟のは泥土をほじくつて見ると、みな腐つていた。もともと悪心をもつ後

妻が炒つた豆の種を杜鵑に与え、種が発芽しないようにしていたのだ。杜鵑を永遠に帰さないようにするためだった。炒つた豆の種が杜川にわたるなんて、誰が知ろうか。炒つた豆が杜川の土地に蒔かれたので、発芽するわけはなかつた。狼のような心の後妻は杜鵑を殺害しようとして、反対に自分の息子を殺害してしまつたのだ。杜鵑は蒔いた豆が発芽したので家に帰ろうとした。しかし、杜鵑は弟を残していくに忍びなく、弟のそばにいた。二日たつて、後妻の虐待を受けた杜鵑は身体が虚弱なたちのために、倒れてしまつた。杜鵑は杜川に「弟よ、おまえは帰りなさい。おまえが植えた豆は発芽したんだよ」といったが、弟は承知しない。自分の代わりに罪を受けた病気の姉を山に残して、帰ることなど願うわけはなかつた。杜川は自分が家に帰つても、母親は再び彼を姉のそばに返すことはないことを知つていた。母の心は本当に狼のようなのだ。もう一日経つと、杜鵑が全身火のようになって、最期に目をあけて弟をみて、永遠にこの世から去つた。杜川は姉の身に倒れ臥し、千回も万回も名を呼んだが、姉は二度と目を覚まさなかつた。杜川は姉を発芽しなかつた黄豆のところ埋め、高く土饅頭を盛り上げた。墓の前で大声で泣いた。太陽も気の毒になつて、大山の背後に隠れるほど泣き、青空が暗くなるほど泣いた。突然、雷が鳴り、狂つた風が吹き荒れ、雨がお盆をひっくり返したように降つた。火龍が牙をむき、爪を研ぎ、遠い村に落ちた。大音響とともに、狼のような後妻が、火龍に焼かれて炭になつた。この大雨が一晚中降り、天が晴れたとき、杜川も姉の墓の前で死んでいた。後に杜鵑の墓から一本の小さい樹が生え、小鳥が樹のまわりを飛びめぐり苦しげに泣いた。嘴に紅の血を滴らせ、その樹の上に止まり、次第にその木に紅い血のような花が咲

いた。その花の木は杜鵑が変わったものだ。紅い花を杜鵑花という。その鳥は杜川が変わったもので、人々はそれを杜鵑鳥と呼ぶ。毎年黄豆を植える季節になると、杜鵑鳥が飛んできて、深い山里で絶えず鳴いており、しばらくすると杜鵑花が開くと満山満嶺に火のような紅に映える。そこで杜鵑花も映山紅という。

(継母の継子いじめ譚)

52、「哥哥雀」講述者名なし。左明聡・採集整理。漢族、35歳、幹部。沙里、遼に流伝。一九八〇年・収集。……『凌雲故事集』中国民間文学集成広西卷資料、壮族、凌雲県文化館編、一九八七年。一八七〜一八八頁。

これはある古老の伝説である。昔、兄弟二人がいて、小さい時、父母がなくなり、互いに助け合って生きていた。兄は毎日川に魚を釣りに行った。釣ってきた魚を二つに分け、身を弟に食べさせ、自分は魚の頭と尾を食べた。長いこと経って、弟が「兄さんの魚の頭はうまいの」と聞くと、兄は笑って「おいしいよ」「私にも頂戴」「これは兄が食べるものだ」といって、兄は食べさせてくれなかった。幼稚な弟は、兄がいなかったら、自分がおいしい魚の頭を食べることができると、と思うようになった。弟は邪念を抱いたのである。ある日、兄が魚を釣りにいくと、弟は後をつけた。ちょうど兄が川でうずくまり、魚を釣っているとき、後から押した。兄は川の中に落ちて死んだ。弟は兄が残した竿で魚を釣ったが、一日かかって二匹釣った。弟は家に帰って、魚の頭を煮て食べた。何と骨ばかり。口が痛くなった。弟は後悔して川にゆき、大声を放って泣いた。兄を呼んでも兄は帰ってこない。ただ弟の泣き声が答えるのみだった。弟は苦しみ、川に飛び込んで死んだ。死んだ弟は一羽の鳥に変わった。山や野の至るところで

「兄さん兄さん」と泣いている。人々はこの鳥を「哥哥の鳥」（兄さん鳥）と呼ぶ。

(ほととぎすと兄弟)譚)

53、「思公」鳥」趙德魁・講述。柳長枝・採集。……『民間故事』(上集) 中国民間文学《三套集成》、融水苗族自治县民間文学編輯組編。一九八六年十月。一五一〜一五三頁。

山に「思公鳥」という鳥がいる。これは人間が変わったものと伝える。古老のいうところによると、昔、大山に二つの家があり、田家と蒙家といった。田家の人が病気で死に、あとには七十数歳の田亜という老人と、その孫の田戈の二人になった。蒙家の者も病気で死に、蒙犴一人になってしまった。田亜老人は家に田戈しかいないのを見て、何とか孫を育てようと決心した。昼間田亜は病身をおして働き、晩にぼんやりした眼で火のそばで麻布をよった。その労働で、二人は何とか生活した。蒙犴は一人で貧しく怠け、昼はあっちへフラフラ、こっちへフラフラ遊び、夜はブタのように寝ていた。もともと家に蓄えなどなく、三年経つと何もなくなり、後には腹をすかして田家に米を借りにきた。米を借りるごとに田亜老人は彼に働くよういうが、耳に入ることはなかった。米を借りて虎が豚にものを借りても返しはしないというふうなもので、田亜も貸さなくなった。ある日、蒙犴は腹が減って、田亜たち二人が山に柴刈りにいっている留守に、田家から米を盗んだ。田亜たち二人が帰ってみると、蒙犴が食べものを盗んでいた。杖で蒙犴の頭をたたいた。蒙犴は米を盗めなかった上に殴られ、あわてて山へ行き野生の果実を捜して飢えをみたした。それから彼は田亜に対して恨みをいだいた。田亜は孫の田戈を愛していたが、田戈がご飯をおいしく食べないのを心配していた。そこで、

松の枝にいる螞蚱（マーリン）という蛙を捕らえに行った。その山のマーリンはよく肥えて大きく、田亜は一度に何匹も捕まえた。毎回マーリンを捕まえてきて、それを炒めて、マーリンの腿を切り取り、肉の多いところを田戈に食べさせようとした。田戈も年寄りを敬うことを解っていたので、おじいさんにマーリンの腿をあげようとした。おじいさんの歯がよくないのを知っていたからである。二人は互いに敬愛していた。ある日の晩、田亜が田戈にことわり、マーリンを捕まえに行った。山でマーリンを捕まえ、川に行った。そこに蒙犴がいて、山中で何ヶ月も野生の果実を食べて生きており、人間だか幽霊だかわからないようになっていた。川の石の上に寝ていたが、田亜老人がやって来たのを見て、心中「自分が餓死しそうになっているのも、田亜のせいだ」と悪念を起した。蒙犴はそっと田亜に近づき田亜を抱いて、川に引きずり込んだ。田亜は蒙犴に捉まり、立っておれず倒れた。蒙犴の着物をつかんだが、二人は川の水に流されていった。田戈は家でおじいさんを待っていたが、夜遅く帰っても帰ってこない。泣きながら眠ってしまった。夢の中でおじいさんが、山でマーリンを捕まえていると、突然毒蛇にまといつかれた。大声を出して目がさめた。その時、空が明るくなった。田戈はすぐに起きて、山に捜しにいった。川の灘に着いたとき、おじいさんと蒙犴が死んでいるのを見つけた。田戈はおじいさんの身体にすがって泣いた。蒙犴がおじいさんを殺したのだと分かり、蒙犴の死体をひっぱり石でなぐった。その後で泣きながら両手で石と泥を持ってきて、おじいさんの死体につけ、高くもりあげた墓を作り、墓のそばで三日三晩泣いた。田戈はおじいさんを思う悲しみにより、そのうちに死んで一羽の鳥に変わった。川の灘の木の上に飛んでゆき一日中

鳴いている。「公阿、コンアー」と。一日また一日、一年また一年、一代から一代へと伝え、一山から一山へ、今に至るまで伝え、人々はこの鳥の鳴く声を聞くと、田戈がおじいさんを思っていると思う。そこで、その鳥を思公鳥というのだ。

（老人と孫という設定は珍しい）

54、「公候鳥」講述者名なし、韋慶龍・採集。汪洞郷一帯に流伝。……

『民間故事』（下集）中国民間文学《三套集成》、融水苗族自治県領導機構。融水苗族自治県民間文学編輯組編。一九八六年十月後記。一四六～一四八頁。

あつい夏の夜、林の中で凄艶な鳴き声がきこえる。「公候、コンコー」と。飢えと寒さに震える子どもが呼んでいるようで、山里の人々はその声を聞くと、わがままな子どもにも「公候鳥の鳴くのを聞いたか。わがまま言う公候鳥のところをやってしまったぞ」という。すると子どもは泣くのをびたりとやめる。公候鳥は人間が変わったもので、悪い子どもが変わったのだという。昔々、ある深い山林に小川があり、小川はゆっくり流れ、時には逆巻くところもある。川岸に一軒の家があり、白髪のじいさんと子どもがいた。子どもの父母は早くに死に、家にはこの子だけで、おじいさんはこの孫をかわいがっていた。一人は寄り添うように魚を捕って生活していた。おじいさんは食事のたびにおいしいものを孫に食べさせ、魚を食べるときも自分は頭と尾を食べ、孫には細かい骨を抜いた肉の部分を食べさせた。ある時、孫が魚の頭や尾を食べたがった。おじいさんが「孫や、よく聞きなさい。頭や尾を食べると、のどにとげが刺さるぞ」といさめた。春から秋になって花が咲いて散り、一年一年過ぎ、生活がよくなっていった。おじいさんは孫に嫁を持たそうとした。だが孫は何もわからない子ど

もだった。孫の嫁は眉が柳のようで、顔は山茶のようにきれいだっ
たが、肚の中は悪かった。おじいさんが老いているのを見て、次
第に面倒をみなくなった。ある日、夫に「魚の頭を食べると長寿
になり、魚の肉を食べると醜い顔になる」といい、鏡をとりだし
た。この孫は妻の話聞いて信じた。おじいさんの髭は白いが、
身体は壮年のようなを見て、自分は嫁に醜いと罵られたので、
嫁の巧みな言葉信じ、おじいさんの良いところを悪くするよう
になった。また魚を捕らえるとき、二人が石灘に行き、川のそば
の石壁が二層の楼のように高くなっているところがあり、下は岩
がごろごろしており、水が打ち寄せ、白い波が飛び散り、ゴーゴー
と音を立てていた。おじいさんは気をつけて孫をひっぱり平らな
石の上におろし、タバコを吸っていた。孫は魚の網を手にして考
えた。たくさんの魚を食べて、百歳の長命になれるなら、嫁がい
うように、おじいさんを岩から突き落とそうと。孫は邪心を起し、
おじいさんの背中を後ろから突き落とす。そして、孫と嫁は魚
をおいしく食べた。しかし、魚の頭や尾はうまくない。骨ばかり
で口やのどに棘のようにささる。どうして魚の肉のうまさがある
うか。やがて嫁は罵って去り、孫は一人になった。彼が魚を捕ら
えに行っても捕らえられなかった。網を投げ網を収める。川の水
は清く、魚は群れになって肥えていたが、網をなげても一匹も捕
れない。半日かかって小エビさえも捕れなかった。彼は川に沿っ
て歩き、知らず知らずのうちに、あの石灘にやって来た。石壁は
高くそびえ、何と怪しいことか。水の勢いは急で、その音は耳を
震わす。突然、彼はおじいさんがあの石の上に座っているのを見
た。タバコを吸って笑いかけていた。彼は「おじいさん」と呼ん
だ。おじいさんは見えなくなった。頭を下げると、目に涙がいっ

ぱいになった。彼が頭をあげると、おじいさんはそこに座ってい
た。まるで何か言うように。彼は声を上げて泣いた。おじいさん
の顔は笑っているようで、彼を慰めた。おじいさんは彼を愛して
いたのだ。翌日、彼はまたここにやって来たが、石の上におじい
さんはいない。石の間から波が打ち寄せ、水は岩に打ちつけ、風
は両岸の樹木に鳴っていた。おじいさん、私は人にだまされた。
「公候アー、コンコー」（公候は壮語の音でおじいさんの意）と叫
び、おじいさんを捜した。泣きながら捜した。後に人々はこの孫
を見なくなり、「公候」となく小鳥を見た。その鳴き声は、泣い
ているようで、訴えているようで、本当に憐れむべきものがある。
この小鳥はあの孫である。あなたが「公候、コンコー」と聞くと、
その声は向こうの山の林に伝わる。あの孫が川の灘でおじいさん
を捜し、各所の林に捜しに行き、永遠に捜している。彼は捜すこ
とができたのでしょうか。

（ほととぎす）と兄弟の変形譚で、兄弟でなく、おじいさんと孫に
なっている）

55、「六十工工」鳥」莫玉珍・講述、女、68歳。呉源・収集整理、
男、40歳、教師。荔浦県花簪郷に流伝。一九八四年・収集。……
『荔浦民間故事集』中国民間文学三套集成。荔浦県民間文学三套
集成領導小組故事組編輯。一九八七年十二月。一〇八〜一一〇頁。
毎年、春がくると深い山の中に鳥がきて、絶えず「六十工工、
リュウシーコンコン、リュウシーコーコン」と「コ」を長くのば
して鳴く。怒っているようであり、凄惨な感じがして、人々に限
りない同情を抱かせる。これはどういう鳥か。伝説によると、人
間が変わったものである。人間がなぜ鳥に変わったのか。これに
は長い物語がある。昔々、十二歳になる貧乏な小僧がいた。名を

石頭といい、春になると金持ちの主のところに、牛の世話係として雇われた。金持ちの主は一日牛の世話をしたら、手間賃をいくらかと決め、六十になったら、まとめて支払うといった。石頭は主が数をごまかす、去年六十日牛の面倒をみたが、三十日分の手間賃しかくれなかった。今年も同じようにされたらかなわないと思っていた。そこで、牛を一日世話したら、泥の団子一つ作り、床下の瓦の鉢に入れておいた。それを主に見せて証拠としようとした。一日ずつ過ぎて瓦鉢の中の泥団子はたくさんたまった。ある日の朝、泥団子を瓦鉢から取り出すと、全部で六十個の泥団子があつた。「六十個になったから、六十日の手間賃がもらえるぞ。今日牛の世話が終わったら主に手間賃をくれるように言おう」と、石頭は喜んで泥団子を瓦鉢に入れて、板で蓋をし、嬉々として牛の世話に行った。石頭が牛小屋にいくとき、主の前を通り過ぎた。主は疑念をもった。「いつもは牛小屋に愁い顔でいやそうにしているのに、今日はどうしてあんなに楽しそうなのか」主は歩いてゆく石頭をみて奇怪に思い、「そうだ、石頭は牛の世話をして六十日になったから、手間賃をもらうつもりなのだ。それであいつはうれしそうなのだ」主は一声うめき、目玉をくるくる回して、「さてよ、あいつに手間賃をやらすにすませないものか」主は急いで石頭の家に行き、目を凝らして一心に探したが見つからない。床下を見たところ、板をかぶせた瓦鉢が目に入った。すぐに板を開けると、中には六十個の泥団子があつた。六十個の泥団子とは何なのか。主は眉を寄せて考え、これは石頭が六十日間牛の世話をしたのを、泥団子で記録したのだとわかった。主は冷笑して「六十個の手間賃を一つの手間賃にしてやれ」というや、泥団子一つだけ瓦鉢に入れ、板で蓋をして、残りの泥団子を持ち去っ

た。石頭は牛の世話をして帰り、早速泥団子を見に行った。板をどけると、びっくりした。瓦鉢の中には泥団子が一つしかない。あわてて探したが、床の下にも屋根にもどこにも泥団子は影も形もなかった。石頭は大声で泣こうとしたが、主に六十日の手間賃を認めてもらえばいいと思いなおし、主のところに行った。「ご主人様、六十日間働きました」というと、主、「六十日間働いただ。おまえ憶えているのか。証拠を持ってこい」主人は水煙管を吸って煙りをはきながら冷たく言った。「わたしは一日働くと、泥団子一つ作っておいたのです。今もう……」「いくつ泥団子があるんだ」「一つです。でも、六十ありました」「持ってきて見せてみる」「今朝、数えたときは六十個でした。今見たら一個しかありませんでした」「うそをいうな。一個の泥団子なら一日の手間賃だ。おまえに一日分の手間賃をやるう」「ご主人さま、ひどい。六十日の手間賃を」といっても、主人は水煙草の袋を持って行ってしまった。石頭は傷つき、泣きながら家に帰り、床に倒れて大声で泣いた。六十日間の手間賃がふいになり、それがたった一日の手間賃にしかないなんて。一日中泣きとおし、怒って食事も忘れ、床に臥したまま、何日も経たずに死んでしまった。石頭は死んで一羽の鳥になったという。六十日の手間賃が一日分にされたのを忘れず、春になると、絶えず悲しみ憤って高く叫ぶ「六十日の手間賃。リュウシーコンコン、リュウシーコーコン」と。

（44、「个工鳥」の類話。使用人と主人との賃金争い。「ほととぎす」と数」通観448の変形と見れなくもない）

56、「張貴楽」鳥の来歴」李明英・講述、周治忠・收集整理、新坪郷に流伝。……『荔浦民間故事集』中国民間文学三套集成。荔浦

泉民間文学三套集成領導小組故事組編輯。一九八七年十二月。一〇〇一—二頁。

山の中に毎年、春夏のころ、張貴樂という鳥が鳴きだす。その鳥の鳴き声は人々に凄凉な気にさせる。これには人を感動させる物語が伝えられている。伝えによると、昔、一人の娘が張家に後妻として嫁に行った。後に一人の男の子を生み、張貴樂と名付けた。先妻にも張貴時という子がいて、二人は次第に大きくなった。後妻は心中、貴時がいると貴樂の財産が半分になってしまふと思ひ、夫が外出しているときに計略を考えた。ある日、貴時と貴樂を呼んで、二人に「今、もう春になったら、取り入れができて芝麻（ごま）の種を植えれば、秋になったら、取り入れができて」といい、一人ずつに種を分け「めいめいで植えなさい。芽が出たら帰ってきてもいいが、芽がでなかつたら、帰ってきてはいけないよ」二人は言われたとおり種をもって山へ行った。兄弟二人は母親が二人に渡した芝麻の種の、一方には炒めた種が入れているのに気付かなかつた。母は貴時を殺そうと思ひ、貴時の袋は炒めた種だった。二人が歩いてゆくと、川に行きついた。洪水で水が漲っているの、貴時は貴樂に「弟よ。川の水が多い。わたしが先に芝麻の種をもって川を渡ろう。おまえは後からついて来い」こうして二人川を渡った。あちらの山に行き、適当な場所を探して芝麻種を蒔いた。やがて貴時の芝麻は芽を出したが、貴樂の種からは一本も出ないので不思議に思つた。さらに数日経つと貴時のものは一面に芽が出たが、貴樂の種はまったく芽を出さなかつた。貴樂は家を出る時、母が言ったことを思ひ出した。「兄が先に家に帰つたら母に教えなさい」と。貴時は先に家に帰つた。貴時が帰ると深山の林の中に貴樂一人が残され、人食い虎に食べ

られてしまった。貴時は家に帰ると、母にわけを言つた。後妻は聞いて、彼ら二人が川を渡るとき、間違えて種を入れ替へてしまつたとわかつた。後妻は慌てふためき、貴時を指差し大声で「この薄情者。どうして弟を見てやらずに、一人で帰つたのか。早く弟を連れてこい。さもないと家に入れてやらないよ」貴時は心中、「変なことをいうものだ。種の芽が出たら、先に帰れと言つたのに、弟の面倒をみないと怒るのか」と思つたが、貴時は急いで芝麻を植えたところに行く、貴樂の影も形もない。貴時はあわて、貴樂はどこに行つたのか、よそに行つて野の果実でも食べているのか、貴時は弟を懸命に捜した。大声で「張貴樂、チャンクイロ」と呼んだ。こうして貴時は弟を捜して、山から山へ、声をあげて、一日また一日呼んだが、弟は見つからなかつた。後妻を恐れて家に帰らなかつた。しばらくして山で餓死して小鳥になつた。弟の張貴樂を捜したためである。今も春になって芝麻を植えるころ、人々は「張貴樂チャンクイロ」と鳴く鳥の声を聞く。今も人々はこの鳥を張貴樂とよぶ。

（継母の継子いじめの話）